音声言語 VII
2016 年
pp. 31-48

長い複合名詞のアクセント

—「携帯電話電源オフ車両」などの説明原理についての覚え書き—

郡　史 郎

要旨　「携帯電話電源オフ車両」のように枝分かれ構造方式では説明できない長い複合名詞のアクセントの決定方式として「重層型順行意味処理方式」を提案した。この方式では次のような 3 段階の処理をおこなう。(1) まず複合名詞全体を冒頭から見てゆき，2 要素からなる下位の複合名詞があればそれを 1 単位として取り出す（たとえば「携帯電話」と「電源オフ」）。(2) 次に，とりだした下位の複合名詞について，それを構成する 2 要素のアクセントが融合するかどうかを意味的な基準によって決める。後部要素が動作性の名詞でも状態性の名詞でもなく，前部要素が後部要素を意味的に限定する関係がある場合は 2 要素は融合し，各要素の元のアクセントにかかわらず全体としてひとつのアクセントを持つ。それ以外の場合は元のアクセントを保持する。融合する場合，全体の具体的なアクセント型は，後部要素の長さや本来のアクセントを考慮して決める。(3) 最後に，隣接する下位単位（下位の複合名詞および独立要素）のアクセントどうしをさらに融合させるかどうかを，先と同じ意味的な基準によって決めてゆく。ここで，後部単位がすでに複合語である場合は融合させない。長い複合名詞に見られるアクセントの変異形は，下位複合名詞への分割のしかたの違いで説明できる部分と，全体を 1 アクセントに融合させる「全融合化方略」と干渉している部分がある。

Notes on the Accentuation of Long Compound Nouns in Japanese

KORI Shiro

Abstract　This paper proposes a “multilayered semantics-based forward procedure” for determining the accent (lexical pitch pattern) of long compound nouns, such as *keetai-den'wa-dengen-ohu-sya'ryoo* “mobile phone power off car (in a train),” which are not accounted for by the internal branching structure. The procedure consists of the following three stages: (1) Extract two-component sub-compounds from a long compound noun in the forward direction (*keetai-denwa* “mobile phone” and *dengen-ohu* “power off”). (2) Determine whether the two components of the sub-compounds accentually fuse applying a semantics-based rule—they fuse and have a new single accent irrespective of their original accents when the second component is neither a verbal noun nor an adjectival noun and the first component exclusively specifies the referent of the second. Otherwise, they keep their original accents. Thus, *keetai* “mobile” and *denwa* “phone,” both of which have a flat accent, fuse into *keetai-de'nwa* with a pitch fall immediately after *de*; however, *dengen* “power” (flat) and *o'hu* “off” (the pitch falls after *o*), keep their original accents. (3) Determine whether or not two adjacent sub-units (sub-compounds and other independent components) accentually fuse applying the same rule as above. Thus, *dengen-o'hu* and *syaryoo* “car of a train” (flat) form *dengen-ohu-sya'ryoo* (the pitch falls after *sya*). An extra rule to prevent accentual fusion is applied when the second sub-unit is a sub-compound. Thus, *keetai-den'wa* and *dengen-o'hu* do not fuse and keep their accents.

1　はじめに

複数の要素（語または接辞的要素）からなり，統語的に 1 名詞として機能する語を以下では複合名詞と呼ぶ[1)]。

東京方言において複合名詞のアクセントがどのように決まるかについての言語学的立場からの研究，そして与えられたテキストからアクセントをどのように決めて音を乗せるかについての工学的立場からの研究は数多いが，これまで得られている知見にもとづく決定原理ではうまく説明できないのではないかと思われるアクセントが長い複合名詞にはある。副題に掲げた「携帯電話電源オフ車両」はその例である。

アクセントの決定原理としては長い複合名詞にも長くない複合名詞にも適用でき，同時に変異形（ゆれ）も説明できるものが望ましいと考えるが，そうした原理を示すことができれば学習者にとっての利便性もあると思われる。本稿の主目的は，そうしたアクセント決定原理となりうる「重層型順行意味処理」について，現時点での考えを記しておくものである。

この原理を一言で説明すると，3 要素以上からなる複合名詞は，そこから下位の 2 要素複合名詞を取り出し,それぞれのアクセントを決めてそれをあらたに 1 要素とし，その後で，隣接する要素どうしをアクセントとして融合させるかさせないかを冒頭方向から順に決めてゆくものである。下位の複合名詞のアクセントについては，意味的な基準によって融合の有無を決め，融合する場合の全体のアクセント型は，後部要素の長さや本来のアクセントを考慮して決める。

以下に示す例では，音の高低を［オ┌ンセージョ┐ーホー］（音声情報）のように角括弧内の表音カナに記号┌（上昇）と┐（下降）を付けることで示す。この語の場合，特殊モーラでの上昇が前にずれた［┌オンセージョ┐ーホー］のような発音もよくあるが，便宜的にそれも含めて［オ┌ンセージョ┐ーホー］という形で示すことにする。

2　アクセントの複合形態の分類

2 要素からなる複合語のアクセントは，全体のアクセントを決める上で両要素がどのようにふるまうかという観点からいくつかの類型に分けることができる[2)]。3 要素以上が複合する場合も，その組み合わせとしてアクセントを類型化できる。この複合形態の分類は，名詞・動詞・形容詞に助詞・助動詞が接続する際にも当てはめることができ[3)]，さらに文節のアクセントの弱化（拙稿 1997 等）という文レベルの現象もこの枠組みの中に位置づけることができる。これについての筆者の考え方の概要は拙稿(2015)でも述べたが[4)]，その後，名称も含め，一部変更した点があるので，あらためて説明しておく。

ここでは 2 要素が複合するにあたって，前部要素と後部要素がアクセントとして融合し全体でひとつのアクセントになるか，そして融合する場合は個々の要素本来のア

クセントの弁別的特徴（下がり目の有無と位置）が生かされるかということを考える。そして，その組み合わせによってできる 5 つの複合形態を「**ⓐ対等合併型の融合**」「**ⓑ後部支配型の融合**」「**ⓒ前部支配型の融合**」「**ⓓ自立・協力型の融合**」「**ⓔ非融合（自立・協力型）**」と名づける[5)]。ⓑとⓒはまとめて吸収合併型の融合と言ってもよい。

2 要素が融合する場合，全体として中高型で，後半要素の冒頭モーラの直後に下がり目を持つものになるのが典型的である。しかし，くわしく見ると，融合する場合でも下がり目の有無と位置は後部要素の特徴（特に長さと音節構成，元のアクセント）に左右されることが，多くの言語的立場からの研究を通じて知られている[6)]。本稿ではそれらの詳細には立ち入らない。また，アクセントが融合しないのはどういう場合かについての研究は少なく不明な点が多い。本稿でも概要を提示するにとどめる。

次に 2 要素の複合形態の各タイプについて説明するが，表 1 に全体像を語例とともにまとめておく。名詞・動詞・形容詞に助詞や助動詞が接続する場合については詳細を前稿で述べたので，以下ではごく簡単に触れるにとどめる。

2.1 複合形態ⓐ：対等合併型の融合

前部と後部それぞれの本来のアクセントがどのようなものであっても，全体としてある決まったアクセント型に融合するタイプの複合形態である。名詞の場合は後部要素の冒頭モーラの直後に下がり目を持つ型になるものが多い。

典型例として「音声情報」を考えると，［「オ┐ンセー＋ジョ「ーホー → オ「ンセージョ┐ーホー］のように，前部と後部それぞれの本来のアクセントの特徴を失い，全体として後部要素の冒頭モーラの直後に下がり目を持つ型に融合している。

「音声情報」の例では対等合併型の融合ということがわかりやすい。ただ，要素間の統語的・意味的な関係がこれと似た「映像資料」だと［エ「ーゾー ＋「シ┐リョー → エ「ーゾーシ┐リョー］であり，前部と後部の本来のアクセントの特徴がそのまま生きているように見える。しかし「音声資料」だと［「オ┐ンセー ＋「シ┐リョー → オ「ンセーシ┐リョー］となること，そして「映像情報」だと［エ「ーゾー ＋ ジョ「ーホー → エ「ーゾージョ┐ーホー］となることから考えると，「映像資料」のアクセントも他と同じく後部要素の冒頭モーラの後で下がる仲間，つまり対等合併型の融合であって，本来の各要素のアクセントの下がり目と対等合併型としてのアクセントの下がり目がたまたま一致したものと考えるのが妥当である。

後部要素が 3・4 モーラの名詞なら，今述べた「音声情報」のように対等合併型の融合をするものが多い。これは特に後部要素が本来中高型でない場合（つまり，頭高型，尾高型，平板型）の場合に多い[7)]。「宗教団体」「美術教育」「ギタークラブ」「京都みやげ」「ハリネズミ」などはその例である。しかし，後部が 3・4 モーラで本来中高型の場合や，後部が 5 モーラ以上（主にカタカナ外来語）で，おおまかに言って特殊拍を 2 つ以上含まない場合は，次節で説明する後部支配型の融合をする[8)]。

表 1　2 要素のアクセントの複合形態

・複合名詞(限定型)とは，後部が事物か非動作性・非状態性の概念で，その指示内容を前部が意味的に限定するもの。**複合名詞(接尾型)**は後部が接尾要素のもの。**複合名詞(非限定型)**は，後部が動作や状態をあらわしたり，後部が前部の指示内容を限定するもの

複合形態	音形	特徴		複合語・文節連続の例	助詞・助動詞の例
ⓐ対等合併型の融合	ⓐ1 後部要素の冒頭モーラ直後で下降	**複合名詞（限定型）**	後部が 3･4 モーラの多く	**音声情報**（「オ┐ンセー＋ジョ「ーホー→オ「ンセージョ┐ーホー）	
	ⓐ2 末尾モーラ直前で下降	**複合動詞（新形）**		読み直す（「ヨ┐ミ＋ナ「オ┐ス→ヨ「ミナオ┐ス），読み始める（「ヨ┐ミ＋ハ「ジメル→ヨ「ミハジメ┐ル）	
ⓑ後部支配型の融合	ⓑ1 後部要素のアクセントを生かす	**複合名詞（限定型）**	後部が 3 モーラ以上で中高型の多く，後部が 1･2 モーラで頭高型の多く	**板チョコレート**（「イ┐タ＋チョ「コレ┐ート→イ「タチョコレ┐ート） **こうもり傘**（コ「ーモリ＋カ┐サ→コ「ーモリガ┐サ）	
	ⓑ2 後部要素の内部で下降	**複合名詞（限定型）（接尾型）** **助詞・助動詞**のいくつか	複合名詞（限定型）の場合，後部が 1･2 モーラで頭高型以外の多く	…メ┐ートル，…セ┐ンチ(cm),	ま┐す, ませ┐ん
	ⓑ3 境界で下降			**わ「らべ┐歌；首「都┐圏，図「書┐館**	
	ⓑ4 尾高型化			**事「業所┐，手「引き書┐**（平板型にも）	
	ⓑ5 平板型化			**緑色；日本犬**（ニ「ホンケン），**潜水艦**	
ⓒ前部支配型の融合		**複合動詞（伝統形）** **助詞・助動詞**のいくつか		読み直す（「ヨ┐ミ＋ナ「オ┐ス→ヨ「ミナオス），買い直す（カ「イ＋ナ「オ┐ス→ カ「イナオ┐ス）	⟨さ⟩せる, ⟨さ⟩れる, ながら
ⓓ自立・協力型の融合		**特定の接尾要素**（さん，たち等）**が付く名詞** **助詞・助動詞**のいくつか		**谷さん**（「タ┐ニ+サン→「タ┐ニサン） **小田さん**（オ「ダ+サン→オ「ダサン） **僕たち**（「ボ┐ク+┐タチ→「ボ┐クタチ） **君たち**（キ「ミ+┐タチ→キ「ミ┐タチ）	が, を, に, で, から, と；は, も；ほど；だ
ⓔ非融合(自立・協力型)		**複合名詞（非限定型）** **助詞・助動詞**の相当数（アクセントの弱化度大），および助詞・助動詞の複合形		**正体不明**（「ショ┐ータイフ「pメー） **中国南部**（「チュ┐ーゴク「pナ┐ンブ） **野田先輩**（ノ「ダ＋セ「ンパイ→ノ「ダセンパイ） **元首相**（「モ┐トシュ「p ショー） **小型軽量**（コ「ガタ＋ケ「ーリョー→コ「ガタケーリョー）	さ┐え, し┐か, な┐ど, の┐み, ま┐で；そ┐うだ, で┐す, らし┐い, み┐たいだ
		文節連続 （前文節が後文節を意味的に限定する場合）		黒い猫（ク「ロ┐イ「pネ┐コ） 赤い鳥（ア「カイ+ト「リ→ア「カイトリ） 秋の空（「ア┐キノ「pソ┐ラ） 鼻の先（ハ「ナノ+サ「キ→ハ「ナノサキ） バスに乗る（「バ┐スニノ「pル） 酒を買う（サ「ケオ+カ「ウ→サ「ケオカウ）	

連用形接続の複合動詞には伝統形と新形があるが，すでに相当程度浸透している新形も対等合併型の融合をする。たとえば「読み直す」なら［「ヨ┐ミ ＋ ナ「オ┐ス → ヨ「ミナオ┐ス］,「読み始める」は［「ヨ┐ミ ＋ ハ「ジメル → ヨ「ミハジメ┐ル］,「買い直す」は［カ「イ ＋ ナ「オ┐ス → カ「イナオ┐ス］,「泣き止む」は［ナ「キ ＋ ヤ「ム → ナ「キヤ┐ム］となり,全体として見れば最後から 2 モーラ目の後で下がる型に融合する。

2.2 複合形態ⓑ：後部支配型の融合

前部のアクセントがどのようなものであっても，後部のアクセントに合わせて融合する形で全体のアクセントが決まる複合形態である。前部が吸収されるタイプの吸収合併型とも言える。

2 要素からなる複合名詞でも，後部が長いと「板チョコレート」[「イ┐タ ＋ チョ「コレ┐ート → イ「タチョコレ┐ート]，あるいは「発光バクテリア」[ハッ「コー ＋ バ「クテリア → ハッ「コーバクテリア] のように，後部のアクセントが複合語全体に適用される形，つまり後部要素の特徴が全体を支配する形で複合するものがある。

この複合形態は，後部が 3 モーラ以上で中高型の漢語やカタカナ外来語に多い。他の例としては，「高山植物」[「コ┐ーザン ＋ ショ「ク┐ブツ → コ「ーザンショク┐ブツ]，「生クリーム」[「ナ┐マ ＋ ク「リ┐ーム → ナ「マクリ┐ーム]。

後部要素が 1･2 モーラの名詞の場合は，境界で下がる例が多い。たとえば「帰国日」[キ「コク＋ヒ → キ「コク┐ビ]，「わらべ歌」[「ワ┐ラベ ＋ ウ「タ┐ → ワ「ラベ┐ウタ]。しかし，「緑色」[「ミ┐ドリ ＋イ「ロ┐ → ミ「ドリイロ]，「女湯」[オ「ンナ┐ ＋ 「ユ┐→オ「ンナユ] のように全体として平板型になる例も少なくない。一方，「こうもり傘」[「コ┐ーモリ ＋ 「カ┐サ → コ「ーモリガ┐サ] など，特に後部が頭高型の場合には複合してもその特徴が生きるものも多い。一般に後部要素が 1・2 モーラの場合は，それが個々に持つ特徴（本来のアクセントと一致するとは限らない）が複合語全体のアクセントを決めると見て，本稿では「後部支配型」とする。

また，「文化圏」[「ブ┐ンカ → ブ「ンカ┐ケン]，「首都圏」[「シュ┐ト → シュ「ト┐ケン]，「秋田圏」[「ア┐キタ → ア「キタ┐ケン] のように「圏」が付いてできる語はすべてその前，つまり境界で下がる[9)]。これに対し，「日本犬」[ニ「ホ┐ン → ニ「ホンケン]，「警察犬」[ケ「ーサツ → ケ「ーサツケン]，「秋田犬」[「ア┐キタ → ア「キタケン] のように「犬（ケン）」が付いてできる語はすべて平板型になる。「圏」も「犬（ケン）」もそれだけで使うことが通常はない接尾要素だが，それが全体のアクセントを決めるという特徴を持っている。

「圏」のほか，「館・感」「山（サン）」「城・嬢（ジョー）」「庁・長」「班・犯」などが付いてできる語も，境界で下がる。一方，「艦」「産（生育地）」「上・場（ジョー）」「鳥・調（チョー）」「版」などが付いてできる語は，全体が平板型になる。全体として境界で下がるか平板型になるかは個々の接尾要素について決まっている。したがって，これも本稿では「後部支配型」とする[10)]。

2.3 複合形態ⓒ：前部支配型の融合

後部のアクセントがどのようなものであっても，前部のアクセントの特徴が複合形全体のアクセントを決める形で融合するタイプの複合形態である。後部が吸収される吸収合併型とも言える。ただし，前部要素の単独発音時のアクセントがそのまま複合形に生かされるとはかぎらない。

本稿で扱う範囲から外れるが，短い複合名詞にはこのタイプの複合形態がある。「素足」「素顔」「素肌」は後部の「足」［ア˩シ˥］，「顔」［カ˩オ］，「肌」［˩ハ˥ダ］のアクセントにかかわらず［˩ス˥アシ］［˩ス˥ガオ］［˩ス˥ハダ］と頭高型になる。全体のアクセントを前部要素が決めているわけである[11)]。また，「見物」［ミ˩モノ˥］，「飲み物」［ノ˩ミ˥モノ］，「着物」［キ˩モノ］，「乗り物」［ノ˩リモノ］のような「動詞+『物』」でも，下がり目の有無は前部要素のアクセントの下がり目の有無（［˩ミ˥ル］［˩ノ˥ム］対［キ˩ル］［ノ˩ル］）に合わせている。

連用形接続の複合動詞アクセントも，伝統形はこのタイプになる。「読み直す」は［˩ヨ˥ミ ＋ ナ˩オ˥ス → ヨ˩ミナオス］，「動き始める」は［ウ˩ゴ˥キ ＋ ハ˩ジメル → ウ˩ゴキハジメル］，「買い直す」は［カ˩イ ＋ ナ˩オ˥ス → カ˩イナオ˥ス］（新形も同じ），「泣き止む」は［ナ˩キ ＋ ヤ˩ム → ナ˩キヤ˥ム］（新形も同じ）なので，前部要素が本来起伏式なら全体が平板式に，前部要素が本来平板式なら全体が起伏式になる。表面的にはどの場合も前部の本来のアクセントが変化しているが，前部のアクセントの特徴が全体のアクセントを決めていると言える。

2.4 複合形態ⓓ：自立・協力型の融合

接辞要素のいくつか，たとえば「さん」「くん」「たち」が人名に付くときの複合形態はこれである。「さん」の場合，「谷さん」［˩タ˥ニ ＋ サン → ˩タ˥ニサン］，「小田さん」［オ˩ダ ＋ サン → オ˩ダサン］となる。前部要素の本来のアクセントをそのまま生かす形で「さん」が接続し，全体でひとつのアクセントに融合している。「くん」も同様である。「さん」「くん」にはその内部や前後で下がるという特徴がないが，その特性を生かして，前部要素のアクセントを継承する形で協力し，全体としてひとつのアクセントに融合する。前部は自立し，後部はその特徴を保ちながらも前部に協力するという意味で「自立・協力型の融合」とする。

「たち」の場合は少し事情が異なる。「僕たち」だと［˩ボ˥ク ＋ タチ → ˩ボ˥クタチ］で，「君たち」だと［キ˩ミ ＋ タチ → キ˩ミ˥タチ］となる。前部要素の本来のアクセントを生かしてはいるが[12)]，「たち」の前が高ければ低く付き，その形でひとつのアクセントに融合する。「たち」の前が低ければ，その高さをそのまま受け継ぐ。「たち」には，低く接続するという特徴があるわけである。前部は自立し，後部は上記の特性を生かしがらも前部のアクセントを生かす形で協力し，全体としてひとつのアクセントに融合している。この複合形態も「自立・協力型の融合」である。

「さん」「くん」は直前のアクセントをそのまま受け継ぐ形で接続するのでこれを「順接型」の接続形式と呼び，「たち」は低く接続するのでこれを「低接型」と呼ぶ。

助詞・助動詞にも「さん」「くん」と同じふるまいをするものがある。特に 1 モーラのものは多くはそうである。助詞で言えば「が・を・に・で・から・と」（格助詞），そして「は，も，ほど」，助動詞で言えば，「だ」がそうである。たとえば「空から」「桜

から」は［「ソ┐ラ ＋ カラ → 「ソ┐ラカラ］,［サ「クラ ＋ カラ → サ「クラカラ］となる。

以上の 4 種の複合形態は，前部と後部がアクセントとしてひとつに融合するタイプである。複合名詞の場合，このタイプの語には一定の特徴がある。それは，後部が事物か非動作性・非状態性の概念で，その指示内容を前部が意味的に限定（排他的に指定）するということである。表 1 ではこれを「複合名詞（限定型）」としている。後部が接尾要素の場合も同じふるまいをする。表 1 ではこれを「複合名詞（接尾型）」とした。

2.5 複合形態ⓔ：非融合（自立・協力型）

複合名詞には「正体不明」［「ショ┐ータイフ「p メー］や「中国南部」［「チュ┐ーゴク「p ナ┐ンブ］などのように，全体としてひとつのアクセントに融合せず，前部も後部もアクセントの弁別的特徴を失わない形で連結するタイプのものがある。ただ，発音としては，特に強調させない限り後部の高さの動きを抑えて言う（記号 p は上昇下降の大きさを抑えた発音であることを示す）。抑え方が大きい場合は「正体不明」が［「ショ┐ータイフメー］のように後部での動きが感じられない発音にもなる。後部の高さの動きを抑えるのは，そのことで全体として「1 語」感を持たせるためと考えられる。したがって，前者は自立し，後部は前部と融合こそしないが「1 語」感を持たせるために協力するということで，これも「自立・協力型」である。これは「黒い猫」「バスに乗る」のような，前部が後部を意味的に限定する文節連続に生じるプロセスと同じである。

「性別不明」［セ「ーベツ ＋ フ「メー → セ「ーベツフメー］や「フランス南部」［フ「ランス ＋ 「ナ┐ンブ → フ「ランスナ┐ンブ］も非融合（自立・協力型）である。この音形では全体でひとつのアクセント型に融合しているように見えるが，これは前部が本来平板型であるための見かけの融合である。以下ではこれを融合とは言わない。これらが自立・協力型の非融合であることは，［セ「ーベツ┐フ「メー］［フ「ランス「ナ┐ンブ］という後部を独立させる発音も容易にできることからもわかる。

「野田先輩」［ノ「ダ ＋ セ「ンパイ → ノ「ダセンパイ］のような語や，「赤い鳥」［ア「カイ ＋ ト「リ → ア「カイトリ］，「酒を買う」［サ「ケオ ＋ カ「ウ → サ「ケオカウ］などの文節連続も，非融合で自立・協力型の複合形態をとる。

このタイプの複合形態をとる複合名詞は，先ほど見た「後半要素が事物か非動作性・非状態性の概念でその指示内容を前部要素が意味的に限定している，あるいは後半が接尾要素」のもの以外である。それは，(1) 後半要素が状態や動作をあらわす場合（サ変名詞，形容動詞語幹等；「正体不明」「日本勝利」「アカウント削除」「即時撤退」「人生終わり」等）[13)]，(2) 後半要素が前半要素の指示内容を限定する場合（「中国南部」「スクリーン中央」「本日午後」「ビール大」「森田一郎」等），(3) どちらかが他方を意味的に補足する関係にある場合（「野田先輩」「港町横浜」等），(4) 前半が接辞要素で，後半要素の位置づけを示す場合（「元首相」等），(5) ふたつの要素が並列関係にある場合（「小型軽量」「白金高輪」など）に分類できる。表 1 ではこれを「複合名詞（非限定型）」としている。

ところで，「修復困難」という語は通常の発音では［シュ「ーフク＋「コ┐ンナン→シュ「ーフクコ┐ンナン］で[14]，表面的には「音声情報」などと同じ対等合併型に見える。しかし，類例である「修復可能」が［シュ「ーフク＋カ「ノー→シュ「ーフクカノー～シュ「ーフク┐カ「ノー］，「修理困難」が［「シュ┐ーリ＋「コ┐ンナン→「シュ┐ーリ「pコ┐ンナン］，「修理可能」が［「シュ┐ーリ＋カ「ノー→「シュ┐ーリカ「pノー］でいずれももとのアクセント型を生かすことを考えると，表面形からはわかりにくいが，実は「修復困難」の複合形態も非融合（自立・協力型）であると見るのが妥当である[15]。

ところで 2.1 節で見たように「映像資料」［エ「ーゾー＋「シ┐リョー→エ「ーゾーシ┐リョー］は対等合併型の融合アクセントである。しかし「修復困難」［シュ「ーフク＋「コ┐ンナン→シュ「ーフクコ┐ンナン］は，今見たように非融合（自立・協力型）である。これは，複合形態の違いは前後のアクセント型の組み合わせによっては（具体的には平板型＋頭高型の場合），わからなくなるということである。

助詞・助動詞は，相当数がこのタイプの複合形態をとると見ることができる。ただし，助詞・助動詞の高さの動きの抑え方は複合名詞の場合よりずっと大きい。

3 アクセント説明原理としての枝分かれ構造と「順行意味処理」

次に，3 要素以上からなる複合名詞のアクセントを決める原理について考える。現在，こうした複合名詞のアクセントを説明する際のひとつの柱となっているのは，「日本舞踊協会」は［日本[舞踊協会]］か［[日本]舞踊協会］かというような，内部の枝分かれ構造（係り受け構造）への着目であろう[16]。この考え方では「正体不明」や「中国南部」のようにアクセントとして融合しない場合は別扱いすることになる。

これに対し，定延利之(1999)は「アクセントを合成するとは，当の合成語を語頭からフット単位で，容量 2 単位の参照箱でスキャニングし，参照箱の状態に応じてアクセント核を付け外しする行動である」という原理によるアクセント決定方式を提案し，「庶務経理関係」「逮捕劇」「電波望遠鏡」などのアクセントを説明している。

定延氏の考え方の骨格を，筆者の理解にもとづいて筆者式の表現と表記により説明する。「庶務経理関係」なら，まず「庶務」と「経理」を見ると，両者は並列的な羅列なのでアクセントは融合させず，「庶務」の発音は本来の［「ショ┐ム］のままにして先に進む。次に「経理」［「ケ┐ーリ］と「関係」［カ「ンケー］を見るが，ここでは「経理関係」という融合アクセントを持つ複合語が考えられ，また「関係」が最終要素なので［ケ「ーリカ┐ンケー］となり，全体として［「ショ┐ムケ「ーリカ┐ンケー］というアクセントが最終的に得られる。「経理関係」が［ケ「ーリカ┐ンケー］となることについては，「『前部要素最終フットか後部要素第 1 フット』と『後部要素の最終フット』が同時に見えた時点で，そこに合成語として新しくアクセント核を付与する」とする。

アクセントとして融合する場合もしない場合も統一的に扱うこの考え方を，内部に

修飾文節を含む「美しい夏山登山」,「迷子の子犬捜索」のような表現に拡張させた論考に横田賢司(2010)がある。

書かれた形で報告するのはこれが初めてになるが，筆者は定延氏とは独立に，氏と共通性のある複合名詞のアクセントの決定方式を考えていた。それは，隣接する 2 要素間の意味的関係を手がかりにして，全体のアクセントを冒頭から順に決めてゆく方式である。内部に修飾文節を含む「美しい夏山登山」等にもそのまま適用できる。この方式を**順行意味処理方式**と呼ぶことにする。

このような方式を考えたのは，複合名詞のアクセントの決定原理も文の内部のイントネーションの決定原理も同じだと思われたからである。筆者は，文内イントネーションは文の枝分かれ構造ではなく，隣接する文節間の意味的関係（意味的限定関係）で決まるものであり[17]，全体の文意を考えた上で，意味的限定関係の有無を文頭から順に見てゆきながらアクセントの音声的弱化または非弱化を決めればイントネーションの骨格が決まると考えている（拙稿 1997, 2008 等）。これが複合名詞のアクセントにも当てはまると考えるのである。語レベルの音調現象と文レベルの音調現象を同じ原理で考えるというのは，枝分かれ構造でどちらも解決しようとするのと同じく一貫性のある考え方になる。文と複合名詞の違いは，意味的限定関係の有無が決めるのは，文レベルではアクセントが弱化するかしないかであり，語レベルではアクセントが融合するかしないである。そういうわけで，枝分かれ構造方式ではなく順行意味処理方式で複合名詞アクセントも考えることにする。

表 2　単純型の順行意味処理方式

(1) 複合名詞を構成要素に分け，冒頭から順に，隣接する 2 要素 A と B について下記の基準にもとづきアクセントを融合させるかしないかを判断する。具体的なアクセント型は，B の長さや元のアクセントにもとづき表 1 から決める。

A・B
- Y が事物か非動作性・非状態性の概念で A がそれを意味的に限定する場合　⇨ A≡B（AB は融合）　➡ 手順(2a)へ
- それ以外の場合　⇨ A｜B（AB は非融合）　➡ 手順(2b)へ

(2a) A と B が融合する場合，AB 全体とその次の要素 C の関係を手順 1 と同様に判断する。

〈A≡B〉・C
- C が事物か非動作性・非状態性の概念で AB 全体がそれを意味的に限定する場合　⇨ A≡B≡C（BC は融合）
- それ以外の場合　⇨ A≡B｜C（BC は非融合）

(2b) A と B が融合しない場合，B とその次の要素 C の関係を手順 1 と同様に判断する

A｜B・C
- C が事物か非動作性・非状態性の概念で B がそれを意味的に限定する場合　⇨ A｜B≡C（BC は融合）
- それ以外の場合　⇨ A｜B｜C（BC は非融合）

(3) 以上の作業を最後まで繰り返す。

単純型の順行意味処理方式

長い複合名詞のアクセントも順行意味処理方式で説明できるというのが本稿の最終的な主張になるが，説明の便宜のために，単純型と重層型の順行意味処理方式の区別を導入する。まずは，単純型について説明する。単純型では，複合語全体としての意味は考えず,冒頭から順に要素間の意味関係を見てゆく。表 2 にその手順をまとめた。

1 回の処理対象区間（定延氏の「参照箱」に対応）を枠で囲み，構成要素のくぎりを記号・で示している。記号≡はアクセントが融合すること，｜は融合しないことを示す。すでに 2.4 節で述べたように，融合するのは 2 要素のうち後部が事物か非動作性・非状態性の概念をあらわし，その指示内容を前部が意味的に限定（指示対象を排他的に指定）する場合，および後部が接尾要素の場で，それ以外の場合は融合しない。

以下，様々な内部構造を持つ複合名詞を例として適用方法を説明する。ここでは個別の要素のアクセントは，その冒頭から数えて何モーラ目の後に下がり目があるかを右肩に付すことで示す。記号⇨は処理の結果を示す。ⓐⓔ等は表 1 に示した 2 要素の複合形態の種類で，処理のよりどころを示す。ⓐ1 は対等合併型の融合で後部要素の冒頭モーラ直後で下降するタイプ，ⓔは非融合である。記号➡は次の処理手順に進むことを示す。アクセント弱化の印は省略する。ここに示すアクセントは 5 名の東京方言話者への面接調査結果で確認したものだが，その実態がうまく説明できている。

「**宇宙科学センター**」【宇宙^{1}・科学^{1}・センター^{1} ⇨ ⓐ1 宇宙≡科学^{4}・センター^{1} ➡ 宇宙科学^{4}・センター^{1} ⇨ ⓐ1 宇宙科学≡センター^{7}】［ウ゚チューカガクセ゚ンター］

「**閲覧履歴消去**」【閲覧^{0}・履歴^{0}・消去^{1} ⇨ ⓐ1 閲覧≡履歴^{5}・消去 ➡ 閲覧履歴^{5}・消去^{1} ⇨ⓔ 閲覧履歴^{5}｜消去^{1}】［エ゚ツランリ゚レキ゚ショ゚ーキョ］

「**アクセス不可状態**」【アクセス^{1}・不可^{1}・状態^{0} ⇨ ⓔ アクセス^{1}｜不可^{1}・状態^{0} ➡ アクセス^{1}｜不可^{1}・状態^{0} ⇨ ⓐ1 アクセス^{1}｜不可≡状態^{3}】［゚アクセスプカジョ゚ータイ］

「**国内主要空港**」【国内^{2}・主要^{0}・空港^{0} ⇨ ⓔ 国内^{2}｜主要^{0}・空港^{0} ➡ 国内^{2}｜主要^{0}・空港^{0} ⇨ ⓐ1 国内^{2}｜主要≡空港^{4}】［コ゚ク゚ナイシュ゚ヨーク゚ーコー］

「**日本サッカー協会**」【日本^{2}・サッカー^{1}・協会^{0} ⇨ ⓔ 日本^{2}｜サッカー^{1}・協会^{0} ➡ 日本^{2}｜サッカー^{1}・協会^{0} ⇨ ⓐ1 日本^{2}｜サッカー≡協会^{5}】［ニ゚ポンサッ゚カーキョ゚ーカイ］

「**予選敗退確実**」【予選^{0}・敗退^{0}・確実^{0} ⇨ ⓔ 予選^{0}｜敗退^{0}・確実^{0} ➡ 予選^{0}｜敗退^{0}・確実^{0} ⇨ ⓔ 予選^{0}｜敗退^{0}｜確実^{0}】［ヨ゚センハイタイカクジツ～ヨ゚セン゚パイタイ゚カ゚クジツ］

「**谷垣禎一大臣**」【谷垣^{2}・禎一^{2}・大臣^{1} ⇨ⓔ 谷垣^{2}｜禎一^{2}・大臣^{1} ➡ 谷垣^{2}｜禎一^{2}・大臣^{1} ⇨ ⓔ 谷垣^{2}｜禎一^{2}｜大臣^{1}】［タ゚ニ゚ガキサ゚ダ゚カズ゚ダ゚イジン］

「**美しい夏山登山**」【美しい^{4}・夏山^{0}・登山^{1} ⇨ ⓔ 美しい^{4}｜夏山^{0}・登山^{1} ➡ 美しい^{4}｜夏山^{0}・登山^{1} ⇨ ⓐ1 美しい^{4}｜夏山≡登山^{5}】［ウ゚ツクシ゚ーナ゚ツヤマト゚ザン］

しかし，この方式では隣接する要素の意味関係だけを見るので，「日本舞踊協会」が「日本舞踊」の協会であっても日本の「舞踊協会」であっても同じく【日本^{2}・舞踊^{0}・協会^{0} ⇨ⓐ1 日本≡舞踊^{4}・協会^{0} ➡ 日本舞踊^{4}・協会^{0} ⇨ⓐ1 日本舞踊≡協会^{7}】で［ニ˩ホ˥ンブ˩ヨーキョ˥ーカイ］になってしまう。しかし，前者は［ニ˩ホンブヨーキョ˥ーカイ］，後者は［ニ˩ホ˥ンブ˩ヨーキョ˥ーカイ］と言い分けられる（窪薗 1995）。

ただ，日本の「舞踊協会」としての「日本舞踊協会」のように，複合名詞の前にそれを限定する別要素が付く構造の語は，後に 4.4 節で説明するように一般にアクセントのゆれが目立つ。ゆれを説明するには，どちらの方式であっても別の考え方を導入するか，例外扱いをせざるを得ない。

また，同じく複合名詞の前にそれを限定する別要素が付く構造の語でも，「市民図書館」のように最後が接尾要素の場合も実態に合うアクセントは得られない[18)]。この点への対応も必要である。

4 重層型の順行意味処理方式

単純型の順行意味処理方式でも枝分かれ構造方式でも説明できない例が，もっと長い複合名詞のアクセントにある[19)]。

4.1 下位単位への分割の上での順行意味処理方式の導入

そうした例のひとつが「携帯電話電源オフ車両」である。これに先述の単純型の順行意味処理方式をそのまま当てはめると，【携帯^{0}・電話^{0}・電源^{0}・オフ^{1}・車両^{0}⇨ⓐ1 携帯≡電話^{5}・電源^{0}・オフ^{1}・車両^{0} ➡ 携帯電話^{5}・電源^{0}・オフ^{1}・車両^{0} ⇨ⓐ1 携帯電話≡電源^{8}・オフ^{1}・車両^{0} ➡ 携帯電話電源^{8}・オフ^{1}・車両^{0} ⇨ⓔ 携帯電話電源^{8}｜オフ^{1}・車両^{0} ➡ 携帯電話電源^{8}｜オフ^{1}・車両^{0} ⇨ⓔ 携帯電話電源^{8}・オフ≡車両^{3}】，つまり［ケ˩ータイデンワデ˥ンゲンオ˩フシャ˥リョー］となる。「電源」を［デ˩ンゲ˥ン］という人なら［ケ˩ータイデンワデ˥ンゲンオ˩フシャ˥リョー］となる。

枝分かれ方式だと，構造は [[[携帯電話]電源]オフ]車両] だが，「オフ」が動作性の要素なのでその前に切れ目を置くと，全体としてやはり上と同じアクセントになる。

しかし実際の発音は，こうした方式が予測しない［ケ˩ータイデ˥ンワデ˩ンゲン˥オ˩フシャ˥リョー］か［ケ˩ータイデ˥ンワデ˩ンゲンオフシャ˥リョー］，あるいは［ケ˩ータイデ˥ンワデ˩ンゲ˥ンオ˩フシャ˥リョー］である[20)]。類例に「最新 GPS データ更新サービス」があるが，これらは単なる例外として処理することを許さない本質的な問題を抱えていると思う。

こうした語のアクセントをゆれを含めて説明するには，これまでとは違う考え方が必要になる。結論から言うと，まず，話者が自分になじみのある 2 要素の下位複合語

を見つけたらそれを冒頭方向から 1 単位として取り出してゆき，それぞれのアクセントを順行意味処理方式で決める。複合語として取り出されなかった要素もそれぞれ 1 単位とし，その上で，分解された単位どうしをアクセントとして融合させるかさせないかを冒頭から順に決めてゆく，という処理方式にすればよい。これを**重層型の順行意味処理方式**と仮に呼ぶことにする。3 要素以上のすべての複合名詞に適用でき，単純型順行意味処理の上位互換方式になる。

長い語は分けて考えるということではあるが，分けたもののアクセントを並べるだけでは，実態に合うアクセントは得られない。この方式は「携帯電話電源オフ車両」などの長い複合名詞のアクセントをゆれを含めて説明するのに有効であるだけでなく，「日本舞踊協会」の言い分けも説明できる。また,「参議院山口県選挙区選出議員補欠選挙」のように構造の理解が容易でない複合名詞にも簡単に適用でき,「人事部長」のように構造の境界が定めにくい複合名詞のアクセントの説明にも有効である。

その作業手順を表 3 に示す。

ここで，手順(3a)は，手順(1)で取り出し，手順(2)で検討と処理が済んだ下位複合語は，その直前の単位とは融合することがないということである。ただし，後に 4.4 節で説明するように，この環境では融合させてしまうこともある。

しかし，下位複合語が「図書館」のように接尾要素（館）が付いてできた語である場合は，これを単純語として扱って手順(3a)の適用範囲外とする。これが手順(2)の後半の規定である。接尾要素は独立性が弱く，それが付いた全体をひとつの単純語と認めやすいと思われるので，無理のない例外規定であろう。この規定を設けることで，3 節の最後で見た「市民図書館」のように，単純型の順行意味処理では実態に合わないアクセントができてしまうことを回避できる。

手順(3b)は，その環境では単純型の順行意味処理をおこなうということである。下位複合語が取り出せない場合は全体に単純型の順行意味処理を適用することになる。

表 3　重層型の順行意味処理方式

(1) 長い複合名詞全体を冒頭から見てゆき，2 要素からなり，自分になじみのある下位の複合語があればそれを 1 単位として取り出す（アクセントとして融合しないものでもよい）。下位複合語と見ない要素もそれぞれ 1 単位とする。（下位複合語をまったく取り出せない場合は表 2 の単純型順行意味処理方式を全体に適用するのと同じことになる）

(2) 取り出された下位複合語のアクセントを表 2 の単純型順行意味処理方式で決める。ここで，接尾要素が付いてできた複合語は単純語として扱う

(3) 隣接する単位 X と Y の関係を冒頭から見てゆき，以下の (3A)(3B) の作業を繰り返す。

(3A)　Y が複合語である場合は，X と Y はアクセントとして融合させない。

(3B)　Y が複合語でない場合，X が Y の意味を限定していれば両者を融合させ，限定していなければ融合させない（単純型順行意味処理と同じ）。

4.2 長大な複合名詞への適用方法

「**携帯電話電源オフ車両**」の例で説明する。

①まず表 3 の手順(1)で「〈携帯電話〉〈電源オフ〉車両」のように〈〉ではさんだ区間を下位複合語として取り出す。別の取り出し方もできるが，それについては後述する。

②手順(2)でそれらのアクセントを単純型順行意味処理方式で決める。具体的には，「携帯電話」は【携帯 ^{0}・電話 ^{0} ⇨ ⓐ1 携帯≡電話 ^{5}】と融合する。「電源オフ」は「オフ」が動作性の語なので【電源 ^{0}・オフ ^{1} ⇨ ⓔ 電源 ^{0}｜オフ ^{1}】となり，融合しない。ただし，この場合特に「オフ」の意味を強調しないかぎり音声としては融合形と同じ。

③次に手順(3)として，分解された単位どうしの関係を冒頭から見てゆく。まず，「携帯電話」と「電源オフ」だが，後者が複合語なので手順(3a)を適用し，両者をそれ以上融合させずそのままにする。先に進んで「電源オフ」と「車両」の関係を見る。「車両」は本稿で言う複合語ではないので手順(3b)を適用すると，「車両」という事物の指示内容を「電源オフ」が限定しているのでアクセントは融合させない。ここでは「電源」と「オフ」はアクセントとして独立しているので，表 2 の単純型順行意味処理方式手順の(2b)にしたがって「オフ」と「車両」の関係を見て【電源 ^{0}｜オフ ^{1}・車両 ^{0} ⇨ ⓐ1 電源 ^{0}｜オフ≡車両 ^{3}】と融合させて処理を終わる。結局，「〈携帯電話〉〈電源オフ〉車両」はアクセントの分け方として「携帯電話 ^{5}｜電源 ^{0}｜オフ車両 ^{3}」となる。

ここでは「電源 ^{0}｜オフ車両 ^{3}」と分かれているが，発音は［デ「ンゲンオフシャ┐リョー］と［デ「ンゲン┐オ「フシャ┐リョー］の両方が可能である。これは，2.5 節で説明したように，非融合の「性別 ^{0}｜不明 ^{0}」の発音が［セ「ーベツフメー］または［セ「ーベツ┐フ「メー］にもなることに対応している。したがって全体としては［ケ「ータイデ┐ンワデ「ンゲンオフシャ┐リョー］または［ケ「ータイデ┐ンワデ「ンゲン┐オ「フシャ┐リョー］という発音実態どおりのアクセントが得られる。「電源」を［デ「ンゲ┐ン］と言う話者なら［ケ「ータイデ┐ンワデ「ンゲ┐ンオ「フシャ┐リョー］となる。

下位複合語の取り出し方の可能性はひとつではない。なじみのあるものがなければ何も取り出さないこともありうる。そうしたことがさらにアクセントのゆれを生み出す。たとえば，一般的になじみのある「女性専用車両」への類推から「電源オフ車両」を最初から取り出す可能性がある。ただ，その場合でも全体のアクセントは結果的に上記と同じになる。「携帯電話」しか取り出さない話者ならば，手順(3c)として「携帯電話」以下に単純な順行意味処理方式を適用してゆくことになる。それは結局，全体に単純な順行意味処理方式を適用することと変わらないので，［ケ「ータイデンワデ┐ンゲンオ「フシャ┐リョー］ということになる。

もうひとつ，「**参議院山口県選挙区選出議員補欠選挙**」の例を見ておく。

まず手順(1)では「〈参議院〉〈山口県〉〈選挙区〉選出議員〈補欠選挙〉」のような形で下

位複合語を取り出しやすそうである。すると手順(2)で「参議院」は【参議 ^{1}・院 $^{-1}$ ⇨ ⓑ3 参議≡院 ^{3}】,「山口県」は【山口 ^{2}・県 $^{-1}$⇨ ⓑ3 山口≡県 ^{4}】,「選挙区」は【選挙 ^{1}・区 $^{-1}$ ⇨ ⓑ3 選挙≡区 ^{3}】,「補欠選挙」は【補欠 ^{0}・選挙 ^{1} ⇨ ⓐ1 補欠≡選挙 ^{4}】となる。ここで「参議院」「山口県」「選挙区」は接尾要素（院，県，区）が付いてできた語なので，手順(2)の後半の規定により，アクセントとして単純語扱いをすることになる。

次に，手順(3)で分解された単位どうしの関係を見てゆく。「参議院」と「山口県」には手順(3b)を適用するが，前者は後者を意味的に限定しないので融合させない。「山口県」と「選挙区」にも手順(3b)を適用し，前者が後者を限定するので【山口県 ^{4}・選挙区 ^{3} ⇨ ⓑ1 山口県選挙区 ^{7}】とする。次に「山口県選挙区」と「選出」にも手順(3b)を適用するが,「選出」が動作性なので融合させない。「選出」と「議員」も手順(3b)だが，前者が後者を限定するので「【選出 ^{0}・議員 ^{1} ⇨ⓐ1 選出≡議員 ^{5}】とする。最後に「議員」と「補欠選挙」には，後者が複合語なので手順(3a)を適用し，融合させない。

結局,「〈参議院〉〈山口県〉〈選挙区〉選出議員〈補欠選挙〉」のアクセントの分け方は「参議院 ^{3}｜山口県選挙区 ^{7}｜選出議員 ^{5}｜補欠選挙 ^{4}」となり，実態どおりの「サ┌ンギ┐ーンヤ┌マグチケンセンキョ┐クセ┌ンシュツギ┐ーンホ┌ケツセ┐ンキョ」になる。

4.3 3要素からなる複合名詞における言い分けと，構造の境界が定めにくい複合名詞のアクセントの説明

重層型の順行意味処理方式だと,「**日本舞踊協会**」の言い分けを，最初に下位複合語として「日本舞踊」を取り出すか「舞踊協会」を取り出すかの違いとして説明できる。

まず「日本舞踊の協会」の場合はまず「日本舞踊」を取り出して【日本 ^{2}・舞踊 ^{0} ⇨ ⓐ1 日本≡舞踊 ^{4}】と融合させる。次に「日本舞踊」と「協会」の関係を見ると，後者は複合語でないので手順(3b)を適用するが，意味としては「日本舞踊」が「協会」を限定するので，融合させて【日本舞踊 ^{4}・協会 ^{0} ⇨ⓐ1 日本舞踊協会 ^{7}】，つまり［ニ┌ホンブヨーキョ┐ーカイ］とする。一方,「日本の舞踊協会」の場合は，まず「舞踊協会」を取り出して【舞踊 ^{0}・協会 ^{0} ⇨ ⓐ1 舞踊≡協会 ^{4}】と融合させる。次に「日本」と「舞踊協会」の関係を見ると，後者が複合語なので手順(3a)により両者は融合させず,【日本 ^{2}｜舞踊協会 ^{4}】，つまり［ニ┌ホ┐ンブ┌ヨーキョ┐ーカイ］とする。

また，複合語には「**人事部長**」のように構造の境界が定めにくいものがある。そのような語にもこの方式は問題なく適用できる。もし「人事」と「部長」を取り出すなら【人事 ^{1}・部長 ^{0} ⇨ ⓐ1 人事≡部長 ^{4}】となる。もし「人事部」を取り出すなら【人事 ^{1}・部 $^{-1}$・長 $^{-2}$ ⇨ ⓑ3 人事≡部 ^{3}・長 $^{-2}$ ➡ 人事部 ^{3}・長 $^{-1}$ ⇨ ⓑ3 人事部≡長 ^{4}】となる。どちらの分け方でも全体のアクセントは［ジ┌ンジブ┐チョー］となる。

4.4 全融合化方略について

3 節末で「日本の『舞踊協会』」の意味での「日本舞踊協会」に関して，このように融合アクセントをとる複合名詞の前にそれを限定する別要素が付く場合には，アクセントのゆれが目立つと述べた。類例を『新明解日本語アクセント辞典』(2014 年版）で見ると,「日本女子大学」は［ニ┌ホンジョシダ┐イガク］で語全体としてひとつのアクセント型にまとまっているが（**全融合形**と呼ぶ),「日本放送協会」は ［ニ┌ッポ┐ンホ┌ーソーキョ┐ーカイ］でふたつに分かれている。この差はどこから出てくるのか。順行意味処理方式でも枝分かれ構造方式でも，これらはふたつに分かれることになる。

こうしたゆれへの言及はもちろんすでにある。窪薗(1995)では枝分かれ方式にとって例外となる［ニ┌ホンジョシダ┐イガク］式の全融合形（挙例は異なる）について，なじみ度の高さが，発音のぞんざいさや発話速度とともに要因としてあげられている。

約 130 語の 3 要素複合名詞について，若年層を中心とする首都圏成育の話者 6 名に対して筆者が行った読み上げ式発話調査の結果では，今見たような，2 要素が融合する複合名詞の前に別の要素がさらに付く名詞，つまり表 2 の表記方式で「A・〈B≡C〉」型（C は接尾要素以外）のうち，A が BC の限定要素になっているものにゆれが目立つ。

それにあたる構造で最終要素 C が漢字 2 字で 3・4 モーラの場合，調査した範囲では全融合させない発音が多い。表 3 の手順(3a)にはこの事実を反映させている。具体的には「海外〈生産拠点〉」「現地〈予備調査〉」「私立〈男子高校〉」「奈良〈女子大学〉」「九州〈工業大学〉」「パレスチナ〈自治政府〉」には，全融合形アクセント（全体として中高型）が各語につき 6 名のうち 2 名以上から出た。しかし，「夏期〈臨時職員〉」「冬期〈特別手当〉」「現地〈医療機関〉」「国内〈主要空港〉」「日本〈サッカー協会〉」「スイス〈放送協会〉」「成田〈国際空港〉」「名古屋〈短期大学〉」「佐藤〈眼科医院〉」「高橋〈製材工場〉」などには全融合形は出なかった。ただ，話者・語によっては全融合形を許容する場合もあった。

このタイプの語にゆれがあることの説明として考えられるのは，全体をとにかくひとつのアクセント型に融合させようとする方略があって（**全融合化**：末尾が平板型接辞なら全体も平板型に融合するが，それ以外は末尾要素の内部か直前で下がる中高型に融合)，上述のアクセント決定原理と干渉を起こしているのではないかということである。

全体としてなじみ度が高い複合名詞は「1 語」感が高く，「1 語」感を意識するほどアクセントも全融合形になりやすいであろうことは想像しやすい。窪薗氏が言う「なじみ度」もこのことであろう。そうした「1 語」感の高い複合名詞は，全融合させたアクセントで語彙目録に登録されていることが考えられる。これに対し，なじみ度が低い複合名詞は，そのつどアクセントを考える必要があるだろう。注 13 で触れた「準備不足」「語学学習」など非融合アクセントが期待されるにもかかわらずアクセントを融合させる例も，なじみ度の高さによる全融合化として一応説明はつく。

ただ，上記の調査結果は単になじみ度の大小だけでは説明がむずかしい。なじみ度が高いとは思えない語でも全融合アクセントが出てくるからである。後半の下位複合

語を単純語とみなすことがあるということかもしれない。

さらに別の要因もありそうである。

構造は今のと同じ「A・〈B≡C〉」型で A が BC の限定要素でも，C が接尾要素の場合は，調査した「名古屋〈営業部〉」「電気〈自動車〉」「中央〈郵便局〉」「左翼〈文化人〉」（以上は BC が中高型），「巣鴨〈警察署〉」「宮崎〈営業所〉」「網走〈刑務所〉」「現代〈日本語〉」「基礎〈スペイン語〉」（以上は BC が平板型または尾高型）については 6 名中 1 名は「A｜B≡C」と分けることが多かったが，5 名はすべてが全融合形「A≡B≡C」で，［ナ「ゴヤエーギョ┐ーブ］あるいは［ス「ガモケーサツショ(┐)］などと発音した。すでに述べたが，独立性の弱い接尾要素が付いた複合語はアクセント的にもひとつの単純語と認めやすく，実質的に全体を 2 要素の複合と見たものであろう。しかし，同じ構造でも冒頭要素が人名の場合には融合しない発音が増える。たとえば「西田〈探偵局〉」「河野〈美容室〉」「遠藤〈皮膚科〉」は［「ニ┐シダタ「ンテ┐ーキョク］，［「コ┐ーノビ「ョ┐ーシツ］［「エ┐ンドーヒフ「カ］という非融合形が調査では多かった（18 発話中 15）。このように，全融合させるかどうかには，人名かどうかという意味要因も関わっている可能性がある。さらなる検討が必要である。

4.5 専門家アクセントとしての全融合化

最後に，長い複合名詞に対する全融合形の使用が社会言語学的意味を持っている可能性について，「日本語教育能力検定試験」の例で記しておく。

言語関係の研究者でも日本語教育を専門としていない人にこの語を見せて発音を求めると，［ニ「ホンゴキョーイクノ┐ーリョクケ「ンテーシ┐ケン］（シケ┐ンも［以下同様］）か［ニ「ホンゴ┐キョ「ーイクノ┐ーリョクケ「ンテーシ┐ケン］とアクセントが出てくることが，身近な範囲の調査では多かった。これらは重層型の順行意味処理の最初の段階で，異なる下位複合語の分けかたをすることから得られるアクセントである。

しかし，やはり身近な範囲の調査だが，日本語教育の専門家はどうやら［ニ「ホンゴキョーイクノーリョクケンテーシ┐ケン］という言い方を好むようである。長くても分けずに全融合形で言うわけである。この現象はなじみ度の高さで説明できるが（専門家は全融合させた形で語彙目録に登録しているが，非専門家はその場でアクセントを考えざるをえない），長い複合名詞における専門家アクセントと言うことができそうである[21)]。

注

1) 2 字漢語名詞はアクセントとしての自律性が高く，構成要素を手がかりとしてアクセントを説明することが難しいものが多いので，ここでは全体で 1 要素をなすものとして扱う。「朝日」「花屋」等，3 モーラ以下の短い和語複合名詞もここでは同様の扱いをしておく。
2) 複合名詞についてはすでに上野善道(1997)による緻密な論考がある。
3) 匂坂芳典・佐藤大和(1983)がそうであるように，この共通性に関しては工学的立場での研

究には以前から意識的に取り入れられている視点である。

4) 旧稿では助詞・助動詞の例を中心に説明した。なお，旧稿と同様，本稿でも記述にあたって学校文法の枠組みを利用する。

5) 拙稿(2015)では「対等合併型」「後部支配型」「前部支配型」「自立・協力型」の 4 種類としていた。今回は融合するか否かという観点を重視し，前 3 者について「融合」の語を補足し，「自立・協力型」について「融合」タイプと「非融合」タイプを分離した。

6) 後部要素の働き，特に音節構成との関係は，最近の論考では田中真一(2011)が詳しい。

7) 詳細は上野(1997)参照。

8) 長さの制限の存在は，（このような前部が後部の指示内容を限定するタイプの複合名詞では）全体として見れば後部の都合でアクセントが決まっているということであり，その意味ではすべて「後部支配型」になる。しかし，本稿では前後の要素の本来のアクセントの特徴との関係をもとに分類しているので「対等合併型」と「後部支配型」を区別する。

9) 「成層圏」は［セ┌ーソ┐ーケン］となるが，これは「圏」の前が特殊モーラであることによる下がり目の前倒しと考えられる。

10) 「圏」「犬」はそれだけを発音すれば［┌ケ┐ン］,「館・感」「艦」は［┌カ┐ン］,「山」「産」は［┌サ┐ン］,「城・嬢」「上・場」は［┌ジョ┐ー］,「庁・長」「鳥・調」は［┌チョ┐ー］である。しかし，単独では同じでも,「圏」と「犬」,「館・感」と「艦」,「山」と「産」,「城・嬢」と「上・場」,「庁・長」と「鳥・調」で，境界で下がるか平板になるかというふるまいが違うのは，単独発話時の発音とは異なるレベルで個々の接尾辞的要素が持つ語彙的な特徴と考えるのが妥当と思われる。

11) ただし「素うどん」「素浪人」など後部が 3 モーラ以上になると対等合併型になる。

12) 「君たち」の例では「君」本来の平板型が尾高型に変わっているように見えるが，これは「たち」の性質のために生じる現象であり,「君」のアクセントが変化したとは見ない。

13) これには対等合併型で融合する例外があり（「準備≡不足」「語学≡学習」など），融合しない形と融合する形の両形が可能な語もある（「政権交代」「事故防止」など）。

14) 困難であることを特に伝えたい場合は［シュ┌ーフク┌コ┐ンナン］という発音が出やすい。

15) 注 14 のような発音が容易にできる点は，対等合併型の「音声情報」とは異なる。

16) 窪薗晴夫(1995)に考え方がまとめられている。

17) たとえば「奈良の神社」は「奈良の」が「神社」の指示対象を限定しているので「神社」の高低変化が相対的に小さくなるが（アクセントの弱化),「奈良の法隆寺」は「奈良の」が「法隆寺」の指示対象を限定していないので「法隆寺」のアクセントは弱化しない。

18) 実態は［シ┌ミントショ┐カン］だが，単純型順行意味処理方式だと【$\boxed{\text{市民}^{1}\text{・図書}^{1}}$・館 ⇨ ⓔ 市民^{1}｜図書^{1}・館 ➡ 市民^{1}｜$\boxed{\text{図書}^{1}\text{・館}}$ ⇨ ⓑ3 市民^{1}｜図書≡館^{3}】で［┌シ┐ミント┌ショ┐カン］となってしまう。

19) 以下，筆者風の順行意味処理方式と意味制約付きの枝分かれ構造方式について検討する。

20) 7 名の東京方言話者への調査結果。本稿では，どのアクセントが「正しい」かとか規範とすべきかではなく，発音の実態を考える。この名称は東京圏では東急電鉄にも存在したが，一般にはなじみ度は非常に低いと思われる。近畿圏だが阪急電鉄では 2003 年から 14 年まで，東京式アクセントによる生の車内放送で「この電車のいちばん前の車両は携帯電話電源オフ車両です」あるいは「携帯電話電源オフ車両では電源をお切りください」というア

ナウンスでこの語がよく聞かれた。統計は取っていないがほとんどは［ケ┌ータイデ┐ンワデ┌ンゲン┐オ┌フシャ┐リョー］か［ケ┌ータイデ┐ンワデ┌ンゲンオフシャ┐リョー］のどちらかであった。「電源」の前にはポーズを置くこともあったが，置かないことも多かった。

21) 井上史雄氏の研究を通じて知られる「専門家アクセント」は，複合形ではないカタカナ外来語の平板発音について言われることがふつうだと思う。1970 年代中頃にクラシック音楽やロック音楽の演奏家や評論家の間（ロックについては特に渋谷陽一氏のラジオ番組などを通じて）やオーディオマニアの間での楽器名やバンド名，機器名に対する平板発音の存在に筆者が気づき，井上氏に報告したのがこの研究の発端だが，当時から非複合のカタカナ外来語だけでなく，たとえば「統語論」のような語を平板に言うようなことも言語研究者の一部にあった。井上(1998)には，1960 年前後に医者は「盲腸炎」を平板で言う傾向があることに気付いていた研究者がいたことが紹介されている。筆者自身は 1970 年代当時から，こうした言い方は独特のアクセントを使う集団への帰属意識を自分が感じていることを示す（同じ見解を井上 1998 も示している）と同時に，自分がその道に通じていることをアピールする手段として使っている側面があるのではないかと考えていた。そのためにはかならずしも平板型である必要はないわけで，実際に最上勝也・篠原朋子(1984)にも「判決」「有罪」の頭高型の発音が「司法やマスコミの関係者のことばに良く出てくる」として紹介されている。ここに記した「日本語教育能力検定試験」のケースも，平板型ではないが，同じことが長い複合名詞にもあてはまるということではないかと思う。

引用文献

秋永一枝（編）(2014)『新明解日本語アクセント辞典 第 2 版』三省堂.

井上史雄(1998)『日本語ウォッチング』岩波書店.

上野善道(1997)「複合名詞から見た日本語諸方言のアクセント」『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂, 231-270.

窪薗晴夫(1995)『語形成と音韻構造』くろしお出版.

郡史郎(1997)「日本語のイントネーション―型と機能―」『日本語音声 2 アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂, 169-202.

郡史郎(2008)「東京方言におけるアクセントの実現度と意味的限定」『音声研究』12(1), 34-53 .

郡史郎(2015)「助詞・助動詞のアクセントについての覚え書き―直前形式との複合形態の観点からの分類―」『音声言語の研究 9』（大阪大学大学院言語文化研究科）63-74.

匂坂芳典・佐藤大和(1983)「日本語単語連鎖のアクセント規則」『電子情報通信学会論文誌 D』J66-D (7), 849-856.

定延利之(1999)「アクセントを合成するとは何をどうする行動か」『文法と音声 II』151-171.

田中真一(2011)「第一バイオリン、ソプラノリコーダーと鍵盤ハーモニカのアクセント：複合語アクセントにおける単語長と音節量の関係」CONFERENCE HANDBOOK, SEVENTH INTERNATIONAL CONFERENCE ON PRACTICAL LINGUISTICS OF JAPANESE (ICPLJ7), 58-59.

最上勝也・篠原朋子(1984)「変わりつつある共通語アクセント(3)」『放送研究と調査』34(3), 58-64.

横田賢司(2010)「現代日本語における複合語のアクセント形成について」『比較文化研究』（日本比較文化学会）91, 131-140.